

# アメリカにおける大学教員養成論の系譜と展開

—大学教員資格論およびア krediteーションの観点を踏まえた先行研究の検討—

大学経営・政策コース 吉田 翔太郎

A study of the Origins and Development of Preparing Future Faculty in the U.S.:  
A Literature Review Integrating Faculty Qualification and Accreditation Perspectives

Shotaro YOSHIDA

This study review explores the historical origins of preparing for future faculty in the U.S., focusing on the period from 1900 to 1934. By synthesizing research on faculty qualifications and accreditation, it traces the evolution from discussions on faculty qualifications to the emergence of preparing for future faculty. The study reveals that while formal initiatives like the Preparing Future Faculty program emerged in the 1990s, their conceptual roots extend to the 1920s. It highlights the roles of higher education associations and the federal government in shaping these discussions. This historical analysis identifies gaps in current understanding and proposes future research directions, including the examination of the interplay between faculty qualification standards, accreditation processes, and the development of preparing for future faculty.

## 目次

- 1 はじめに
  - 2 主要概念の整理と概要
    - A 大学教員養成
    - B 大学教員資格
    - C ア krediteーション
    - D 小括
  - 3 大学教員養成論の展開に関する研究
    - A 1960-80年代とする研究
    - B 1950年代とする研究
    - C 1940年代以前とする研究
    - D 小括
  - 4 20世紀初頭における大学教員資格論とア krediteーションの展開に関する研究
  - 5 今後の研究課題
  - 6 おわりに
- 脚注  
引用文献

## 1 はじめに

本稿の目的は、アメリカにおける大学教員養成の議論と取組みにかかる先行研究を、大学教員資格論とア krediteーションの観点から検討し、現状と課題を

明らかにすることである。

日本では、2019年の中央教育審議会大学分科会の審議まとめにおいて、博士課程における「研究者・大学教員の養成に当たり重視されるべき事項」として「各大学は博士課程の学生全体を対象とした教育能力を身に付けるための授業科目開設等の取組（プレFD）を推進すべき」（中央教育審議会大学分科会 2019）とされたことを背景として、2020年の大学院設置基準改定により、学識を教授するために必要な能力を培うための機会（プレFD）の設定又は当該機会に関する情報提供が努力義務化された。

同様の取組みは、2000年前後から一部の研究大学において実施されてきたものであり、「大学教員養成プログラム」と称される（今野 2016）。そのモデルとされたアメリカのPreparing Future Faculty (PFF) が「プレファカルティ・ディベロップメント」と紹介され（和賀 2003b）、2005年の中央教育審議会答申にて、大学院に求められる人材養成機能として、研究者等の養成、高度専門職業人、高度で知的な素養のある人材とあわせて大学教員の養成が挙げられた（中央教育審議会 2005）。その後2008年の中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」で「大学院における大学教員養成機能（プレFD）」と記述されたことで次第に認知度を高めていった（栗田 2020）。

モデルとなった PFF は、アメリカカレッジ大学協会 (AAC&U) と大学院協議会 (CGS) との共同で実施され、大学院生に研究能力だけでなく教育能力を含む幅広い能力を教授することを目的として 1993 年から開始された。1986 年の Professional and Organizational Development Network in Higher Education (POD ネットワーク) における TA 訓練の議論から派生し、1989 年に連邦教育省の高等教育改善資金 (FIPSE) による助成を受けて、AAC&U と 3 組の大学によるパートナーシップによる試行を経て、PFF が本格的に開始された (Gaff 2000; AAC 2002)。PFF の理念的基盤は 1990 年の Ernest L. Boyer の報告書にある (Gaff and Simpson 1994)。Boyer は大学教授職の役割を 4 つの学識で再定義し、大学院教育での「教育」の学識育成の必要性を指摘した (ボイヤー 1990=1996)。

PFF プログラムの多くは助成終了後も継続されたことにくわえ、他機関にも波及し、現在も AAC&U による大学院生への支援などが行われているが、プログラムの主要人物 Jerry G. Gaff は「アメリカ高等教育の主流に定着しなかった」と評価している (Gaff 2021)。また、プログラムの有効性に関する報告が不十分であることも指摘されている (Diggs 2017)。

一方、大学教員養成は長年、大学院教育と高等教育の重要なトピックとして位置づけられてきたものである。教育と研究の関係や大学院でのティーチング重視の主張は 20 世紀初頭から存在した (Schachter 1991; Zimmerman 2020)。また、1969-1971 年の PICT プロジェクト報告書で Kenneth E. Eble は、大学院での教員養成向上が高等教育の再構築に重要だと述べ、1933 年の AAUP 委員会の調査結果との類似性を指摘し、大学でのティーチング軽視の危険性と改善の必要性が長年続いていることを示唆してさえた (Eble 1972)。

Boyer の理念は真新しいものではなかったが、当時は斬新な概念として取り入れられた。これは、これらの議論や取り組みのアメリカ高等教育史における位置づけが十分に明らかにされていないことにも起因しよう。そこで本稿では、アメリカにおける大学教員養成論及び関連する大学教員資格論、アクレディテーションの展開に関する先行研究を検討し、現状と課題を明らかにする<sup>1)</sup>。この歴史的視点からの整理は、現代の高等教育が直面する諸課題に新たな洞察を提供する可能性を持つ。

本稿では、現代の大学教員養成の取り組みの歴史的起源を遡及的に探る。まず、主要概念の整理と概要を概観した後 (2 章)、現代の PFF プログラムに代表さ

れる取り組みの起源を 1920 年代に遡って検討する (3 章)。さらに、1900 年代初頭の大学教員資格論とアクレディテーションの萌芽が後の大学教員養成論の発展に与えた影響を考察し (4 章)、今後の研究課題を指摘する (5 章)。この逆時系列的アプローチにより、現代の課題と歴史的な発展過程の関連性を提示する。

## 2 主要概念の整理と概要

### A 大学教員養成

はじめに大学教員養成とは何かということをも日本の事例も交えて検討する。本研究では大学教員養成を、採用前 (主に大学院教育)、採用後 (主に FD) の各段階における専門知識の獲得、研究手法習得、教育スキル開発などの大学教員になるための準備プロセス全体と位置づける。なお、大学教員養成といった場合は FD といった現職研修や、プレ FD といった大学院段階における教育があるが、本研究では後者に着目する。

そもそも教員養成は主に初中等教員の養成を指す用語だが (木岡 2018)、日本では、学校教育法第一条で大学は学校とされるため、大学教員養成という概念も成立しうる。しかし、大学における教職課程という教育システム及び教員免許という資格がある初中等教員養成とは異なり、大学教員養成には、大学設置基準による学位等の資格要件があるものの、大学に大きな裁量の余地が与えられており、また、高等教育の卒業に関しても明確な規定はない。この実態や、戦前からの大学院修了者以外を大学教員にするという力学 (橋本 2009) などの影響により、大学教員に至るルートは多様で専門職の理念型に沿わないものとなっている (石井 2008)。しかし、取得時期に振れがあるが、本務教員のうち約 6 割が博士課程修了者、約 2 割が修士課程修了者であることに鑑みると、主として大学院教育が実質的な養成課程であるといえる (文部科学省 2022)。また、アメリカにおいても、大学教員の約半数が博士号取得者であり (Griffey 2017)、設置形態やテニユアの有無で違いはあるものの、実質的に大学院教育が実質的な養成課程となっている。

### B 大学教員資格

次に大学教員資格について検討する。本稿では、大学教員資格を、採用時、採用後の昇進、テニユア審査 (身分保障) の各段階における必要な学位 (博士号など)、研究業績の量と質、教育経験等による大学教員として認められるための具体的な要件や基準と位置づける。

日本では、「大学教員の公的な資格制度は存在しない」とされ、先述のとおり大学設置審査における教員審査における概括的な判断基準として、大学設置基準「第四条 教員の資格」に学長、教授、准教授、助教、助手の資格が規定されている（川島 2018）。特に教授は、「博士の学位を有し、研究上の業績を有する者」など、主に研究能力が規定され、教育上の能力は具体的な規定がない。一方で、「博士学位は大学教授職の基礎条件とみなされている」という指摘もある（木本 2020）。

同様にアメリカでも、アメリカは大学の教授資格を定めた全国レベルの規定を持たず、州レベルでもニューヨーク州などの一部州を除きほぼ同様となっており、さらに個々の機関毎に多様な実態がある（立川 2019）。また、研究大学での教授資格は必ずしも研究能力偏重ではない。主要大学は准教授への昇進条件に教育能力、研究能力、社会貢献のすべてとされるなど、一概につかむことは難しいが、「研究学位Ph.D.は、大学への着任資格として定着したのみならず、かつては医学博士（M.D.）や法務博士（J.D.）等が独占していた専門職大学院までを浸食しつつある」という指摘もあり（立川 2019）、大学院の学位（修士・博士）が実質的な資格となっていると言える。

### C アクレディテーション

最後にアクレディテーションについて検討する。アクレディテーションは「質の保証・改善を目的として高等教育機関や教育プログラムの審査を行うために実施される第三者評価方法の1つ」とされ、1910年代アメリカの地域別団体アクレディテーション団体である北中部協会（NCA）における認定カレッジリストの公表がその起源とされる（大学評価・学位授与機構 2016）。一方、教育辞典で初めて高等教育のアクレディテーションという用語が登場するのは1950年になってからであった（前田 2003）。そこでは、アクレディテーションは、“accreditment”として「何らかの機関や組織が発行する教育機関リストに掲載されることで、米国内の教育機関に与えられる承認」（Zook & Haggerty 1936）とされたが、後の連邦教育局の報告書で「アクレディテーションという言葉の解釈が一般に混乱していた」（Kelly et al. 1940）とされたように、最初期にはその概念は未確立であった。

本研究では、アクレディテーションを、Kelly et al. (1940) の定義に従い、「教育機関が認定を受けるために満たすべき最低基準の設定（prescription of minimum standards）」、「教育機関が最低基準を遵守しているか

どうかを確認するための訪問または検査（visitation or inspection）」、「認定教育機関リストの発行または公表（issuance or publication）」を含む広義の行為として解釈する。

### D 小括

本稿では、大学教員養成を将来の大学教員の能力獲得プロセス、大学教員資格をその成果を評価する基準として、これらを相補的な関係にある概念として捉える。さらに、これらと密接に関連するアクレディテーション論議にも注目する。後述するように20世紀初頭、大学院の普及と共に博士号が大学教員資格として求められ始めた時期に、アクレディテーション基準にも学位要件が組み込まれたからである。この相互関係の分析を通じて、アメリカにおける大学教員養成論の起源をより包括的に理解することを目指す。

## 3 大学教員養成論の展開に関する研究

次に現代のPFFに代表されるような大学教員養成の取組みとその議論の起源に関する研究を概観する。

### A 1960-80年代とする研究

研究大学における段階的な大学教員養成機能が確立されてきた経緯とその実態を解明した吉良（2008; 2014）は、戦後から1970年代にかけて学士課程学生数が急増したことへの対応としてティーチングアシスタント（TA）が多用され教育の質が低下したことで、始まった部局レベルでのTAの訓練プログラムを萌芽と位置付ける。1980年代半ば以降には、多くの研究大学に設置された教授・学習センターにて全学的なTA訓練プログラムが普及し、その後、大学教員養成にかかる全国的な議論が注目されるようになり、1993年からのPFFプログラムの実施に繋がっていったとする。

また、アメリカの大学院教育の実態を日本において比較的早期に紹介した宮澤（1980）は、西部ワシントン教育大学のウッドリング（Paul Woodring）による*The Higher Learning in America*を参照しながら、学士課程学生に対する教育の内容と、大学院博士課程での研究との間に存在する「溝」が繰り返し指摘されてきたこと、そして、博士号取得者のかなり多くが大学教員となり、かつ、学士課程段階の学生を相手に講義をする場合が多いという事情を考慮して、1970年代以降、博士課程において、専門分野の研究のみならず幅広い学習が求められるようになったことを指摘している。

さらに、大学教員養成のための教育を行う大学院はまだそれほど多くはなかったことにも言及している。

さらに、宇田川 (2015) も、戦後の高等教育の拡大を受け多数の非伝統型学生をどう教えるかが課題となる中で、大学院における大学教員を目指す院生にティーチングを教える仕組みや、現代のFDのような現職大学教員に対する研修制度も存在しなかったことを受け、1972年にFIPSE創設につながったと述べている。

## B 1950年代とする研究

一方、1950年代以前の状況に言及した研究もいくつか見受けられる。坂本 (2019) は、アメリカ女性大学人協会 (American Association of University Women) が1960年代初頭に創設したカレッジ・ファカルティ・プログラムの制定過程とその運用について考察する中で、1958年のアメリカ教育協議会 (American Council on Education : ACE) による報告書 *College Teaching as a Career* で、教員不足に陥っていた当時の大学教授職の現状と将来展望や、大学教員の博士号取得者数などの動向が紹介され、当時からの大学教員養成に関する議論の存在が明らかにされている。

さらにBerelson (1960) やウォルターズ (1965=1969) は、1950年12月には、連邦教育局及びACEの共催で大学教員養成に係るシカゴ会議が開催されており、そこでの議論は *The Preparation of college teachers* (1950年) 及び *Improving College Instruction* (1951年) として刊行されたほか、朝鮮戦争期を挟み、1955年の十五人委員会 (Committee of Fifteen) による報告書 *The Graduate School Today and Tomorrow*、1956年のACEによる報告書 *Expanding Resources for College Teaching*、1957年の大学院協会 (Association of Graduate Schools : AGS) による報告書 *White Paper*、連邦教育局報告書 *Staffing the Nation's Colleges and Universities*、カーネギー教育振興財団による報告書 *The Education of College Teachers* など、1950年代後半にかけて議論が繰り返されてきたことが指摘されている。

佐藤 (2015) は、Mary D. Sorcinelliの研究に基づきアメリカにおけるFDの歴史を整理する中で、1951年に、当時のミシガン大学大学教育センター長 Wilbert J. McKeachieによるTAのためのハンドブック *Teaching Tips* が、また、寺崎 (2006) は、アメリカにおける大学教員論を概観する中で、1950年に刊行されたラドクリフ大学大学院部長 Bernice B. Cronkhiteによる大学教員志望者向けハンドブック *A Handbook for College*

*Teachers: An Informal Guide* が刊行されていたことに言及している。

## C 1940年代以前とする研究

さらに1940年代にも遡る。前述の寺崎 (2006) は、1949年には、ハーバード大学及びラドクリフ大学の教員によって、将来大学教員になることを希望する大学院生を対象として、課外科目としての連続講座が開設されていたことを明らかにしている。同時期は、連邦教育局や大学団体、個別機関を巻き込んだ実態調査や、実習教育や専門教育の実施といった個別機関における実践事例やその効果に関する議論がなされるなど、ナショナルな議論が展開されていたほか、後述するような1940年代までのこの問題に関するメタレベルのレビューもなされていた (吉田 2021a)

第二次世界大戦後の1947年、高等教育に関する大統領委員会の報告書は、カレッジのティーチングは明確な準備プログラムを持たない唯一の主要な学問的専門職であると指摘し、大学教員養成を主要な課題として位置づけた (吉田 2021b)。また、1945年には、ACEのErnest V. Hollisが、1930年代からの博士号取得者の職業分析を行った著書 *Toward Improving Ph D Programs* にて、大学院教育が大学教員養成にもっと注意を払うよう勧告していた。

さらに1930年代、1930年及び1938年には、シカゴ大学で組織された高等教育機関管理者協会において大学教員養成をめぐる議論が行われており、この時期に既に大学教員養成の必要性が認識されていた (和賀 2003a)。また、1933年には、AAUPの大学教育委員会報告書において、大学教員自らがこの問題に取り組むべきという立場から、教育と研究の相補関係にも言及しながら大学院教育における大学教員養成の充実を提言していた (吉田 2022)。

そしてこのAAUP委員会設置の背景となったのは、1929年のAACカレッジ教員の採用及び養成委員会報告による大学院への大学教員養成への提言であった。AACは教授法の訓練を与えること、「幅広い知的関心」を持つ者だけを入学させること、教師を目指す者にアメリカの大学についての講義を与えること、そして「研究」を過度に強調しないことを提言した (Berelson 1960; Brubacher and Rudy 1968; Boyer 2011)。このAACの行動は、1925年にオハイオ州マイアミ大学のRaymond M. Hughesがとりまとめた大学院のランキングに関する報告書 *The Graduate Schools of America* において、AACに対しこの問題に関心を持つように提言

したことによる。先行研究に依拠すればこれ以上遡ることはできないが、1920年代にこの議論がおこったことは、第一次世界大戦後における高等教育の量的な拡大が示唆されている。

#### D 小括

以上みてきたように、1920年代からの主に大学団体による議論の存在が示唆され、研究だけでなく教育という理念に基づく大学院教育を通じた大学教員養成の取組み及びその議論は既に100年近い歴史を持っていることが明らかになった。ナショナルかつ組織的な取組みという点で1990年代以降のPFFは画期的なものであったが、先述のとおり決して目新しいものであったわけではなく、幾度となく議論が起こっては落ち着くというサイクルを繰り返してきたともいえるだろう。しかし、1920年代半ば以降に大学教員養成論がおこった背景やその詳細については不明瞭な点が多いことが課題として残されている。

#### 4 20世紀初頭における大学教員資格論とアクレディテーションの展開に関する研究

本節では、1910年代以前の大学教員資格論とアクレディテーション論議を検討し、後の大学教員養成論の基盤形成過程を考察するための視座を得る。

アメリカの大学院は19世紀末に誕生し、20世紀初頭にかけてアメリカの大学院で学位を取得した者が大学教員となっていた（福留 2020）。大学教員への着任資格としての博士号の普及時期に関する包括的研究は少ない。1890年前後、ハーバード大学とミシガン大学の専任教員のうち博士号取得者は20～25%であったが、1900年前後から一部の研究大学で博士号が教授の資格として要求されるようになった（潮木 1993）。そして、1904年には、ニューヨークシティカレッジは全ての教授は以後博士号保持者に限ると宣言され、1905年にはイリノイ大学でも1905年に同様の宣言がなされた（ルドルフ 2003）。その後、1920年にはその割合はほぼ40%、とくに准教授以下の若手教員では、ハーバードが77%、ミシガンが62%にまで普及したとされる（立川 2019）。主要研究大学における博士号保有教員の状況など具体的な描写がなされているものの（ガイガー 2023）、いずれも包括的ではなく個別機関の単発的な記述があるのみであり、当時の高等教育全体の傾向を必ずしも反映しているわけではない<sup>2)</sup>。

一方、19世紀末から博士号に対する批判があり、特

に1900年に設立されたアメリカ大学協会（AAU）では最初期から博士号に関する議論が活発に展開されていたが指摘されている（Berelson 1960）。例えば、1901年の年次総会では、ハーバード大学学長 Charles Eliot が、博士論文が長すぎると批判し、同大学の Alan Briggs は、将来の大学教員のための幅広いトレーニングを呼びかけた。1903年には同大学哲学教授の William James が論文“Ph.D. Octopus”で博士号の過度の重視と、その弊害について論じ、博士号の所有が教育の成功を保証するわけではないにもかかわらず、博士号を持つ教員のみを採用する傾向が当時拡大していたことを批判した。

さらに1912年にはAAU年次総会で「アメリカの大学における博士号の現状」が議題となり、博士号の存在意義などが議論され、学位が大学における労働者のための組合員証のようにになっている現状を批判する意見もみられた。このように、1900年代には、大学はティーチングにもっと重点を置くべきだと考える人々と、研究をもっと受け入れるべきだと主張する学者との間で、断続的な論争が繰り広げられた（Gieger 1986）。

さらにこの時期は、アクレディテーション団体や財団が、学位取得者を教員に一定数要求することで、カレッジを大学院に送り込むことに影響したことが指摘されている（Berelson 1960）。1900年代にはマス機関とエリート機関の階層化・多様化が進む中で、全米州立大学協会（National Association of State Universities: NASU）やアメリカ大学協会（Association of American Universities: AAU）、連邦教育局（United States Bureau of Education: USBE）やACEなど、様々なアクターがアクレディテーションを模索していたことが指摘されている（Selden 1960; 新堀 1977; Harclerod 1980; Hawkins 1992; 前田 2003; 日永 2015; 坂本 2018）。

その中でアクレディテーションを実施したのは先述のとおりNCAであった。先行していた中等学校アクレディテーションからの影響で、1900年代末にカレッジのアクレディテーションが検討され、1909年にはアクレディテーション基準が定められた。そこではカレッジ教授陣の最低必要条件として、修士号取得に必要な大学院での学業と同等以上の学業、博士号取得に必要な大学院での学業と同等の研究訓練が通常必要であるとされ、アクレディテーション基準の大学教員資格に学位要件が設定されたのである<sup>3)</sup>。

1913年にNCAの認定カレッジリストが公表されると、1922年には諸団体による基準を統一すべくACEによる「原則と基準」（ACE基準）が策定され、それに応じて1923年末には、1922年のACE基準に沿って

NCAは基準を改訂した。そこでは、大学教授陣の要件として、おそらく修士課程を含む大学院での2年間の研究を挙げ、学部長には博士号または同等の専門教育が必要であるとされた。1920年代半ばにはアクレディテーションに対する批判が展開されると、NCA内で基準を抜本的に見直す機運がうまれた。1934年の基準改定により定量的基準が放棄され、機関の目的に即した評価、所謂「質の評価」へと転換していった(前田2003)。

以上のようにアクレディテーションにおける大学教員資格の扱いが変遷した時期と、前章でみた大学教員養成論が萌芽した時期は重なっており、大学教員養成論の発展と密接に関連していた可能性が示唆されるが、先行研究の主たる関心は大学教員資格の規定や議論、大学教員養成論との関連性には置かれていない。ここに大学教員養成論の発展との関係性を検討する余地が残されている。

## 5 今後の研究課題

以上の検討を踏まえ、アメリカにおける大学教員養成論研究の今後の課題について述べる。まず、大学教員資格論の展開に関する先行研究からは、1920年代における大学団体の議論にその萌芽がみられていたことが確認できた。さらに、1900年代初頭に博士号取得が一部の研究大学によって求められるようになっていたこと、そして1910年代に開始されたアクレディテーション基準には大学教員資格として学位要件が設定されたことが明らかになった。注目すべきは、1920年代のアクレディテーションへの批判を受けて、1930年代半ばには学位要件が撤廃されたことである。この変遷は、大学教員養成論の発展と時期的に重なっており、両者の関連性を示唆している。

大学教員養成論と大学教員資格論を相補的な関係と捉え、大学教員資格論が大学教員養成論の起源となった可能性が示唆され、アクレディテーション論議がその媒介となった可能性がある。先行研究は大学教員養成論の歴史的展開に関する重要な知見を提供しているが、その変遷を包括的に分析し、大学教員資格論やアクレディテーション論議との関連性を十分に検討したものは少ない。この関係性の解明は、従来の研究大学とリベラルアーツカレッジの対立という解釈の再考にもつながる可能性がある。

さらに各議論におけるアクター、すなわち大学団体や連邦教育局自体への考察も不十分である。アメリカ

では、教育に対する連邦政府の機能は合衆国憲法に規定されていないため、原則州の権限とされているが、1910年には連邦教育局に高等教育課が設置され、先にみたようなアクレディテーションを含め高等教育に係る動向に大学団体とともに関与していた(Lykes 1975)。

以上の課題を踏まえ、1900年から1934年の期間における大学教員資格論から大学教員養成論への転換過程に焦点を当てた研究、具体的には、以下のような問いの探究が求められる。すなわち20世紀初頭という時期に、主要大学団体や連邦教育局というアクターによって、大学教員資格の議論はどのように展開されたのかという問いである。より具体的には以下のとおりである。

1. 20世紀初頭の大学教員資格に関する議論において、研究能力と教育能力はどのように位置づけられ、評価されていたのか。
2. 主要大学団体や連邦教育局は、大学教員資格論から大学教員養成論への転換にどのような役割を果たしたのか。
3. アクレディテーション基準における大学教員資格の規定の変遷は、大学教員養成論の発展にどのような影響を与えたのか。

これらの問いを通じて、大学教員資格論から大学教員養成論への転換過程を多角的に分析し、その歴史的意義を明らかにすることができるだろう。これらの問いに答えるためには、1900年から1934年までの期間を分析対象とし、アクレディテーションの成立過程に基づき、二つの時期、すなわち、1900年代から1910年代半ばまでの「基準模索期」と、1922年のアメリカ教育協議会による統一基準の策定から1930年代半ばにかけての「再構成期」に分けて検討する必要がある。

「基準模索期」においては、主要大学団体(AAU及びNASU)のアクレディテーションや大学基準策定への関与、連邦教育局によるナショナルなアクレディテーションの模索とその影響、そしてNCAによるカレッジ基準の策定とアクレディテーション実施の過程を詳細に分析し、その当時の大学教員資格に関する考察を深める必要がある。

「再構成期」では、ACE基準の策定過程、AACによる大学教員養成論の提起、そしてNCAによるアクレディテーション方針声明の策定過程を重点的に分析し、大学教員資格論の展開と大学教員養成論の萌芽を考察することが求められる。

また、各期を通してアクターである大学団体や連邦教育局の設立過程や、そこでのキーパーソンに着目し

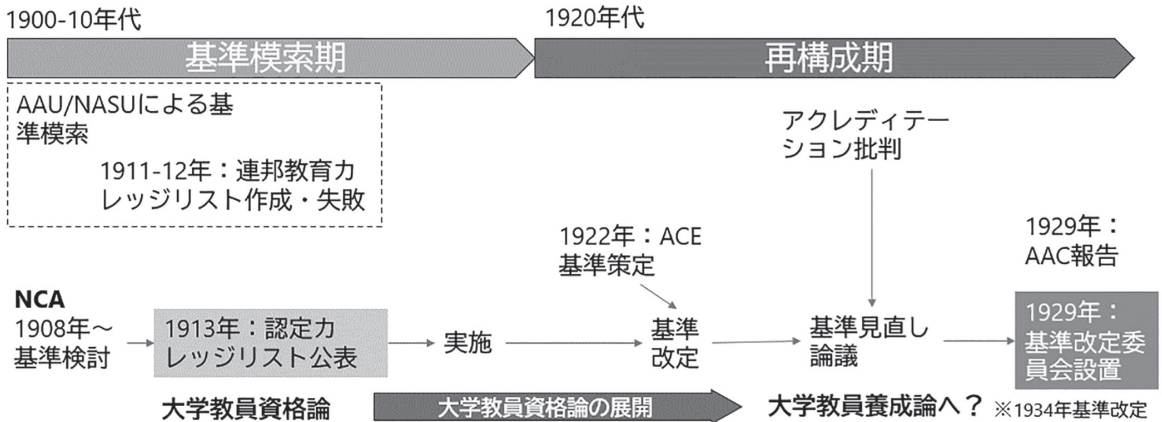


図1 今後検討すべき時期区分と各事象

た年次総会等での議論の分析もあわせて行うことで、事象間の関係性やその理念を指摘することも求められる。

この分析を通じて、アクレディテーション基準策定過程における大学教員資格論議の展開と大学教員養成論の萌芽を明らかにできる。特に、1929年のAACによる大学教員養成の提言と、アクレディテーション基準における学位要件撤廃の動きの交錯は、大学教員資格論から大学教員養成論への展開を示唆している。カレッジ教育の質確保という観点から、大学教員資格論を超えた大学教員養成論へと発展していく過程を詳細に描き出すことが求められる。

なお、本研究で明らかにする大学教員養成論の起源とその後の展開を、より長期的な視点で理解する上で、カウリーやChiapetta (1952) による1930-40年代の分析も重要な示唆を与える。吉田 (2021a) が取りあげたカウリーによる論文“*Toward Harmonizing the Conflicting Points of View About the Ph. D. Curriculum for Preparing College Teachers*”における、研究 (research)、スカラシップ (scholarship)、教授 (teaching) 三者の関係性に関する分析や、Chiapettaが言及した「リサーチ・ユーズ・ティーチング」論争は、本研究が対象とする時期 (1900-1934年) に芽生えた大学教員養成論がその後どのように展開し、あるいは停滞したかを理解する上で重要な視点となる。

## 6 おわりに

本稿では、アメリカにおける大学教員養成論及び関連する大学教員資格論、アクレディテーションの展開に関する先行研究を概観し、その現状と課題を明らかにした。その結果、大学教員養成に関する議論や取り組みが100年近い歴史を持ち、幾度となく議論が起こっては落ち着くというサイクルを繰り返してきたことが明らかになった。特に注目すべきは、1920年代から1930年代にかけて、大学教員資格論が大学教員養成論へと展開していった可能性である。この時期、アクレディテーション団体による基準から学位要件が撤廃される一方で、大学院教育を通じた大学教員養成の重要性が認識されるようになった。この転換点を詳細に分析することで、現代の大学教員養成論の起源とその発展過程をより深く理解できる可能性がある。

今後は、本稿で指摘した研究課題に取り組むことで、アメリカにおける大学教員養成論の歴史的展開をより精緻に描き出すことが求められる。そうした研究の蓄積は、単に歴史的事実を明らかにするだけでなく、現代の大学教員養成や高等教育の質保証に関する議論に新たな視座を提供しうる。

## 脚注

- 1) 本研究ではアメリカの大学教員養成論に焦点を当てているが、アメリカの事例を日本の文脈でも理解するために日本の状況にも言及している。また、大学教員という用語については、大学教授職とも称されるが本研究では大学教員という用語を用い、主に4

年生大学の学士課程教育に関わる常勤の教員（職階を問わない）と位置づける。ただし、引用や特定の文脈においては、原文の表現を尊重し「大学教授職」「カレッジ教員」などの表現も使用する。

2) 1957年の統計によると、博士号を取得したフルタイム大学の全新人のうち23%しか博士号を取得しておらず、これは1953年から8%の減少であったとされる（Brucher & Rudy 1968）。

3) 潮木（2009）が紹介しているように、研究中心主義を規定した Wilhelm von Humboldt の論稿が「発見」され再解釈された1910年のベルリン大学創設100周年記念が開催された時期と重なっており、短絡的な考察はできないが、学位要件が大学教員資格とされたこととのつながりを検討する余地もある。

### 引用文献

- Association of American Colleges & Universities 2002. "PFF--The Road Ahead"  
 〈<https://www.aacu.org/publications-research/periodicals/pff-road-ahead>〉（最終閲覧日：2024年9月13日）
- Berelson, Bernard. 1960. *Graduate Education in the United States* Harper & Row; Revised Edition, pp.6-42.
- Brubacher, John S., Ruddy, Willis. *Higher Education in Transition: an American history, 1636-1968*, Harper, 1968.
- ボイヤー・アーネスト・L著（有本章訳）1996.『大学教授職の使命』玉川大学出版部, pp.37-52, 73, 110-116.
- Boyer, John W. 2011. *Teaching at University of a Certain Sort: Education at the University of Chicago over the past century The college of the University of Chicago*, pp.100-104.
- Schachte, Hindy L. 1991. "Teaching versus Research A 1910 Perspective" *College Teaching*, Vol.39, 2, pp.85-86.
- 中央教育審議会 2005.「新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—（答申）」  
 〈[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05090501.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05090501.htm)〉（最終閲覧日：2024年9月11日）
- 中央教育審議会大学分科会 2019.「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～（審議まとめ）」  
 〈[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1412988.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1412988.htm)〉（最終閲覧日：2024年9月11日）
- 大学評価・学位授与機構 2016.『アメリカ合衆国の高等教育・質保証システムの概要』20-21頁。  
 〈<https://www.niad.ac.jp/consolidation/international/info/usa.html>〉（最終閲覧日：2024年9月11日）
- Diggs, Alisha. 2017. "Toward A Systematic Review of the Preparing Future Faculty Program Initiatives" 2017 *ASEE Annual Conference & Exposition Proceedings*.
- Eble Kenneth E. 1972. *Professors As Teachers* Jossey-Bass Series in Higher Education.
- 福留東土 2020.「アメリカの大学教授職」有本章編著『大学教授職の国際比較』東信堂, pp.57-77.
- Gaff, Jerry G., Simpson, Ronald D. 1994. "Faculty Development in the United States" *Innovative Higher Education*, Vol.18, No.3, pp.167-176.
- Gaff, Jerry G., Pruitt-Logan, Anne S. & Weibl, Richard A. 2000. *Building the Faculty We Need: Colleges and Universities Working Together*. Association of American Colleges and Universities & The Council of Graduate Schools.
- Gaff, Jerry G. 2021. *The History of Faculty in AAC&U: A Personal Essay* Association of American Colleges and Universities. pp.27-30.
- Geiger, L. Roger. 1986. *To Advance Knowledge: The Growth of American Research Universities, 1900-1940* New York: Oxford University Press.
- ガイガー・ロジャー・L（原圭寛ほか訳）2023『アメリカ高等教育史』東信堂, pp.374-429.
- Griffey, Trevor. 2017. "The Decline of Faculty Tenure: Less From an Oversupply of PhDs, & More from the Systematic De-Valuation of PhD as a Preparing for College Teaching"  
 〈<https://lawcha.org/2017/01/09/decline-faculty-tenure-less-oversupply-phds-systematic-de-valuation-phd-credential-college-teaching/>〉（最終閲覧日：2024年9月15日）
- Harclerod, F. F. 1980. *Accreditation, American Association for Higher Education* Washington DC. pp.20-24.
- Hawkins, Hugh. 1992. *Banding Together: The Rise of National Associations in American Higher Education, 1887-1950* Johns Hopkins Univ Press.
- 橋本鉦市 2009.「第四章 大学教員—養成計画なき専門職—」『専門職養成の日本の構造』玉川大学出版部, pp.64-83.
- 日永龍彦 2015.「戦後大学改革に影響を与えた米国のアクレディテーションの実態—1940年前後の動向に焦点をあてて—」『現代社会と大学評価』第11号, pp.121-141.
- 石井美和 2008.「アカデミック・プロフェッション養成における制度と政策—専門職論の視点からの一考察—」『東北大学教育学研究科・教育学部研究年報』第57集, pp.133-151.
- 川島啓二 2018.「大学教授資格(日本)」『大学事典』  
 〈<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E6%95%99%E6%8E%88%E8%B3%87%E6%A0%BC-2875992>〉（最終閲覧日：2024年9月15日）
- 今野文子 2016.「大学院生等を対象とした大学教員養成プログラム（ブレFD）の動向と東北大学における取組み」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第2巻, pp.61-74.
- 木本尚美 2020.「大学教授職のキャリアジェンダーの視点から—」有本章編著『大学教授職の国際比較』東信堂, pp. 210-228.
- 吉良直 2008.「アメリカの大学におけるTA養成制度と大学教員準備プログラムの現状と課題」『名古屋高等教育研究』第8巻, pp. 193-215.
- 吉良直 2014.「大学院生のための段階的な大学教員養成機能に関する研究」『教育総合研究』第7巻, pp. 1-20.
- 栗田佳代子 2020.「大学院生のための教育研修の現状と課題」『教育心理学年報』第59集, pp.191-208.
- Kelly, Fred J., Frazier, Benjamin W., McNeely, John H., Ratcliffe, Ella B. 1940. *Collegiate Accreditation by Agencies within States* Office of Education, Federal Security Agency, p.3.
- Lykes, Wayne Richard. 1975. *Higher Education and the United States Office of Education (1867-1953)* Washington, D. C.

- Bureau of Postsecondary Education, United States Office of Education.
- 木岡一明 2018. 「教員養成」『大学事典』  
 〈<https://kotobank.jp/word/%E6%95%99%E5%93%A1%E9%A4%8A%E6%88%90-52430>〉(最終閲覧日: 2024年9月15日)
- 前田早苗 2003. 『アメリカの大学基準成立史研究』東信堂, pp.50-103-154.
- 宮澤康人 1980. 「アメリカの大学院」宮原将平・川村亮編『現代の大学院』早稲田大学出版部, pp. 173-196.
- 文部科学省 2022. 学校教員統計調査令和4年度第2部大学等の部教員個人調査学歴区分別専門分野別本務教員数  
 〈[https://www.e-stat.go.jp/index.php/stat-search/files?page=1&layout=datalist&cycle=0&toukei=00400003&tstat=000001016172&tclass1=000001216346&tclass2=000001216373&tclass3=000001216374&tclass4=000001216375&cycle\\_facet=tclass1%3Atclass2%3Atclass3&tclass5val=0&stat\\_infid=000040168158](https://www.e-stat.go.jp/index.php/stat-search/files?page=1&layout=datalist&cycle=0&toukei=00400003&tstat=000001016172&tclass1=000001216346&tclass2=000001216373&tclass3=000001216374&tclass4=000001216375&cycle_facet=tclass1%3Atclass2%3Atclass3&tclass5val=0&stat_infid=000040168158)〉(最終閲覧日: 2024年9月15日)
- ルドルフ・F (阿部美哉ほか訳) 2003. 『アメリカ大学史』東信堂, 364頁。
- 坂本辰朗 2018. 「大学アクレディテーションとアメリカ教育審議会」『大学論集』第50集, pp.17-32.
- 坂本辰朗 2019. 「アメリカ女性大学人協会による女性大学教員養成プロジェクト —1960年代のカレッジ・ファカルティ・プログラムを中心に」『教育学論集』第71集, pp.1-27.
- 佐藤浩章 2015. 「ファカルティ・ディベロップメントの構造と評価に関する研究」北海道大学大学院教育学院博士課程論文(未刊行) pp.51-53.
- Selden, W.K. 1960. *Accreditation, A Struggle over Standards in Higher Education* New York: Harper & Brothers.
- 新堀通也 1977. 「第2章 アクレディテーションとアメリカの高等教育」天城勲・慶伊富長編『大学設置基準の研究』東京大学出版会, pp.35-75.
- 立川明 2018. 「大学教授資格(アメリカ)」『大学事典』  
 〈<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E6%95%99%E6%8E%88%E8%B3%87%E6%A0%BC-2875992>〉(最終閲覧日: 2024年9月15日)
- 寺崎昌男 2006. 『大学は歴史の思想で変わる—FD・評価・私学—』東信堂, pp.5-65.
- 潮木守一 1993. 『アメリカの大学』講談社学術文庫, pp.235-295.
- 潮木守一 2009. 『フンボルト理念の終焉? 現代大学の新次元』東信堂, 205-231頁。
- 宇田川拓雄 2015. 「アメリカ社会学会におけるティーチング支援—ハンス・O・マウシュの功績とその遺産—」『高等教育ジャーナル 高等教育と生涯学習』第22巻, pp. 33-42.
- 和賀崇 2003a. 「1930年代の米国大学における「将来の大学教員」への教育トレーニング」『教育制度研究紀要』第4巻, pp. 17-25.
- 和賀崇 2003b. 「アメリカの大学における大学教員準備プログラム」『大学教育学会誌』第25巻, 第2号, pp. 83-89.
- 吉田翔太郎 2021a. 「アメリカにおける大学教員養成と大学院教育に関する研究—1930-40年代の議論に着目して—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』60, pp.475-484.
- 吉田翔太郎 2021b. 「(研究ノート) アメリカにおける大学教員養成と大学院教育に関する研究」『現代社会と大学評価』17, pp.104-122.
- 吉田翔太郎 2022. 「1930年代アメリカにおける大学教員養成に関するAAUPの見解に関する考察—AAUP大学教育委員会の活動に着目して—」『大学経営政策研究』12, pp.121-135.
- ウォルターズ・E編 (木田宏監訳) 1969. 『これからの大学院』東京大学出版会, pp. 1-87.
- Zimmerman, Jonathan 2020. *The Amateur Hour: A History of College Teaching in America* Johns Hopkins University Press, p.103.
- Zook, George F. & Haggerty, M. E. 1936. *The Evaluation of Higher Institutions: I. Principles of Accrediting Higher Institutions*. University of Chicago Press, p.18.

(指導教員 福留東土教授)

